Osaka University Knowledge Archive

Title	『法華経』の蒙古語訳について
Author(s)	樋口, 康一
Citation	神戸市外国語大学外国学研究. 1990, 21, p. 109-136
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/18878
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『法華経』の蒙古語訳について*

樋口康一

0. はじめに

近年，蒙古語仏典の言語資料としての価値が認識され，その文献学的・言語学的観点からの研究が盛んになってきているが[(1)]，『法華経』の蒙古語訳に関する限り，その研究は皆無に近い．理由は二つ考えられる．一つは製作年代が17世紀以前に遡り得ると見なし得る『法華経』の版本，写本がないため言語資料としての価値がないと予見されたこと，いま一つは大部の仏典だけにその取り扱いがかなり困難であると見なされたことである．

筆者は現存する『法華経』の蒙古語訳の版本・写本を調査した結果，この仏典が蒙古訳経史の諸問題を考察する上でかなりの資料的価値を有する，との結論に至った．本論文の目的は①利用可能でありながら具体的に論じられることのなかった『法華経』の蒙古語訳を紹介すること，②そのテキストの系譜関係を論じるためのいくつかの材料を提供すること，③特に言語資料としての価値の一端を示すものとして，本仏典中で頻繁に観察される副動詞 büged の特異な未報告の用例を紹介すること，にある．また同時にこれは今後の『法華経』の蒙古語訳に対する詳細な研究に向けての言わば序論と位置付け得るものである．

I．現存する『法華経』の蒙古語訳

『法華経』の蒙古語訳は世界各地の図書館，研究機関等に収められているが，

---

*本研究は昭和61・62年度科学研究費補助金による研究成果の一部である．

(1) 樋口1980，pp. 175～7 を参照．

現在所在が公表されているものは版本4種，写本1種の合計5種類である．

版本のうち3種は18世紀に開版されたもので，蒙古大蔵経所収のもの1種と北京木版本2種である．大蔵経のものはL. Ligeti のカタログの整理番号に従えば№868（以下K868と略称），北京木版本は W. Heissig の整理番号に従えば№16と178（以下各々PLB16，178と略称）である[2]．残る1種は東洋文庫所蔵のもので年代は不詳，Poppe, Hurvitz, Okada の整理番号に従えば22（以下T22と略称）である[3]．

一方，写本はストックホルム国立民族学博物館所蔵の S. Hedin 収集品中のもので，P. Aalto の整理番号に従えばH1058Bである．『法華経』の写本は他にもコペンハーゲン王立図書館所蔵のMONG. 496 がある．MONG. 496 はPLB16に依存していることが明かであるのに対し，H1058Bはその種の依存関係が明白ではないため別種とした[4]．

これら5種のうち文献学的に有意義な奥書を有するものはPLB16のみである．そこではこの版本は「Erdeni mergen dayičing tayiji が Chos kyi ḥod zer の原本を Širegetü guuši の訳を参考にして改訳した」旨の記載がある[5]．ここで言及されている3者はすべて実在の人物であってChos kyi ḥod zer は14世紀に，また Erdeni mergen dayičing tayiji, Širegetü guuši はともに16～7世紀に活動していた翻訳家である[6]．以下では，PLB16をA本，H 1058 B

（2） Ligeti 1942–4, p. 225, Heissig 1954, pp. 27～8, p. 156を参照．K868の題名は Čaγan lingqu-a neretü degedü nom yeke kölgen sudur「白蓮という名の妙法大乗経」，PLB16は Čaγan linqu-a neretü nom-un kölgen sudur「白蓮という名の法の乗経」，PLB178は Qutuγ-tu degedü nom-tu čaγan lingqu-a neretü yeke kölgen sudur orosiba「聖・妙法もてる白蓮という名の大乗経ここにあり」である．北京木版本は世界各地の図書館に収められているが，ここではPLB16はコペンハーゲンの王立図書館所蔵の版本MONG. 499に，PLB178は東洋文庫所蔵の版本23によった．

（3） Poppe, Hurvitz, Okada 1964, pp. 25～6を参照．T22の題名は Čaγan lingqu-a neretü sudur orosibai「白蓮という名の経ここにあり」である．

（4） H1058B は Aalto 1954, p. 75, MONG. 496 は Heissig-Bawden 1971, pp. 218～9 を参照．前者の題名は Čaγan lingqu-a neretü degedü nom yeke kölgen sudur「白蓮という名の妙法大乗経」でK868と同一である．

（5） 上掲 Heissig 同箇所および Heissig-Bawden 同箇所を参照．

（6） Chos kyi ḥod zerは Bodhicaryāvatāra『入菩提行論』の訳者として名高い．これは成立年代が明かな蒙古語仏典の中では最古のものである．Erdeni mergen dayičing tayiji, Širegetü guuši の事績に関しては Heissig 1962, pp. 21～2を参照．

をB本，T22をC本，K848をD本，PLB178をE本とする．A～Eの順序は便宜的なものである．

行文の字句の構成に着目する限り，5者の間で字句の相違を認め得る場合はあっても，構文そのものが全く異質であると見なし得る箇所はあまりない．概して5者の相違は僅少である．その一例として「勧持品」（ABでは第13章，CDEでは第12章に相当）冒頭の一節を掲げる．(7)

A tendeče bodisdv maqasdv em-ün qaγan : bodisdv

B tendeče bodisdv maqasdv em-ün qaγan : bodisdv

C tendeče bodisdv maqasdv em-ün qaγan : bodisdv

D tendeče bovadhi sadova mahaa sadova otačin-u qaγan : bovadhi sadova

E tendeče bodisado-a maqasado-a otočin-u qaγan : bodisado-a

A maqasdv yeke sambaγ-a-tu ber qorin tümen nököd

B maqasdv yeke sambaγ-a-tu ber qorin tümen nököd

C maqasdv sambaγ-a-tu ber qorin tümen nököd

D mahaa sadova yeke sambaγ-a-tu ber qorin tümen nököd

E maqasado-a yeke sambaγ-a-tu ber qorin tümen nököd

A bodisdv-nar-luγ-a qamtu ber ilaǰu tegüs nögčigsen-ü

B bodisdv-nar-luγ-a qamtu ber ilaǰu tegüs nögčigsen-ü

C bodisdv-nar-luγ-a qamtu ber ilaǰu tegüs nögčigsen-ü

D bovadhi sadova-nar-luγ-a qamtu ber ilaǰu tegüs nögčigsen-ü

E bodisdv-nar-luγ-a qamtu ber ilaǰu tegüs nögčigsen-ü

A ilete üges-i eyin kemen öčibei :: ilaǰu tegüs nögčigsen a ene

(7) 以下では煩雑を避けるため和訳はAに対するもののみを掲げる．その他のものとの間に差異が生じ得る場合には注記する．

B ilete eyin kemen öčibei :: ilaǰu tegüs nögčigsen a ene

C eyin kemen öčibei :: ilaǰu tegüs nögčigsen a ene

D eyin kemen öčibei :: ilaǰu tegüs nögčigsen a ene

E ilete eyin kemen öčibei :: ilaǰu tegüs nögčigsen a ene

A udq-a-dur sedkil-ečegen öčügüken ayiladun soyurq-a : ilaǰu tegüs

B udq-a-dur sedkil-ečegen öčüken ayiladun soyur ha : ilaǰu tegüs

C udq-a-dur : sedkil-ečegen öčügüken ayiladun soyurq-a : ilaǰu tegüs

D udq-a-dur sedkil-ečegen öčügüken ayiladun soyurq-a : ilaǰu tegüs

E udq-a-dur : sedkil-ečegen öčügüken ayiladun soyurq-a : ilaǰu tegüs

A nögčigsen a bida ber tegünčilen iregsen bari nirvan boluγad : ene

B nögčigsen a bida ber tegünčilen iregsen bari nirvan boluγad : ene

C nögčigsen a bida ber tegünčilen iregsen bari nirvan boluγad : ene

D nögčigsen a bida ber tegünčilen iregsen bari nirvan boluγad : ene

E nögčigsen a bida ber tegünčilen iregsen bari nirvan boluγad : ene

A nom-un ǰüil-i qamuγ amitan-a üǰegülsügei :

B nom-un ǰüil-i qamuγ amitan-a üǰügülsügei :

C nom-un ǰüil-i qamuγ amitan-a üǰügülsügei :

D nom-un ǰüil-i qamuγ amitan-a üǰügülsügei :

E nom-un ǰüil-i qamuγ amitan-a üǰügülsügei :

「そこで菩薩・摩訶薩たる薬王，菩薩／摩訶薩たる大楽説は二万の眷属たる／菩薩らとともに世尊の／面前で言葉をこのように申し上げた．『世尊よ，この意味においてはいささかもお心を／お煩わせ下さいますな．世尊よ，我々は如来が涅槃に／入られてから（も），この経典を一切衆生に教示する所

存です.[8]』」

ここで観察できる相違は，bosisdv～bovadhi sadov-a のような表記面に関する差異を除けば，もっぱら em-ün「薬の」: otačin-u「薬師の」のような語彙面での差異に限られている．後者あるいは ilete üges-i : ilete : ϕ の差異は，原典となったテキストの差異につながる可能性はある．しかし，訳出の発想を全く異にすると見なし得る箇所は皆無である．

事情は偈頌に関しても同じである．以下にその例として同じく「勧持品」偈の第20・21頌を掲げる.[9]

20a

A yirtinčü-yin erketü yeke čidaγči :

B yirtinčü-yin erketü yeke čidaγči :

C yirtinčü-yin erketü yeke čidaγči :

D yirtinčü-yin erketü yeke čidaγči

E yirtinčü-yin erketü yeke čidaγči :

20b

A činu jarudasun bida bükün bolai :

B činu jarudasun bida bükün bolai ::

C činu jarudasun bida bükün bolai :

D činu jarudasun bida bükün bolai :

---

(8) この箇所は坂本幸男・岩本裕1964（以下岩本訳と称する）では以下の通りである．「そのとき，偉大な志を持つ求法者のバイシャジャ＝ラージャ（薬王）とマハー＝プラティバーナとは，二百万人の求法者たちに囲まれて，世尊の面前でこの言葉を語った．『このことに関しましては，世尊はご憂慮なさらないでください．世尊よ，わたくしどもは如来が入滅されたあとも衆生にこの経説を教示し宣揚するでありましょう．』」なお，sedkil-ečegen öčügüken ayiladun soyurq-a は純然たる蒙古語として逐語訳すれば「心を少しお煩わせ下さい」で，必ずしも否定の意味にはならない．öčügüken 単独では否定を含意しないからである．蔵本では thugs las chung ngur mdzad du gsol で蒙古語の行文はこれを機械的に置換したもの．ここでは敢えて意訳した．ちなみに漢訳（羅什訳）の該当箇所は「唯願世尊．不以為慮．」である．一方，眷属である菩薩の数は梵本，蔵本とも「二百万」であり，「二万」とするのは漢訳と蒙古本のみである．なお，以下では，漢訳中で最もよく知られた羅什訳『妙法蓮華経』（大正262）をもって漢訳を代表させる．また，梵本は Wogihara & Tsuchida 1958に，蔵本は北京版による．

(9) 例文中 la は第1頌・第1句の意．以下も同様である．

E činu ǰarudasun bida bükün bolai :

20c

A kedüi toγatan nirvan-a amurliγsad :

B kedüi toγatan nirvan amurliγsad :

C kedüi toγatan-iyar nirvan amurliγsad :

D kedüi toγatan-iyar nirvan amurliγsad :

E kedüi toγatan-iyar nirvan amurliγsad :

20d

A sedkil-ečegen öčügüken ayiladun soyurq-a ::

B sedkil-ečegen öčüken ayiladun soyurq-a ::

C sedkil-ečegen öčügüken ayiladun soyurq-a ::

D sedkil-ečegen öčügüken ayiladun soyurq-a ::

E sedkil-ečegen öčügüken ayiladun soyurq-a ::

21a

A arban ǰüg-eče ali iregsed :

B arban ǰüg-eče ali iregsed

C arban ǰüg-eče ali iregsed :

D arban ǰüg-eče ali iregsed :

E arban ǰüg-eče ali iregsed :

21b

A yirtinčü-yin ǰula bükün ber :

B yirtinčü-yin ǰula bükün ber :

C yirtinčü-yin ǰula bükün ber :

D yirtinčü-yin ǰula bükün ber :

E yirtinčü-yin ǰula bükün ber :

21c

A taγalal-i sayitur medegsen-iyer :

B taγalal-i sayitur medegsen-iyer :

C taγalal-i sayitur medegsen-iyer :

D taγalal-i sayitur medegsen-iyer :

E taγalal-i sayitur medegsen-iyer :

21d

A ünen üges-i ügülegtün ::

B ünen üges-i ügülegtün ::

C ünen üges-i ügülegtün ::

D ünen üges-i ügülegtün ::

E ünen üges-i ügülegtün ::

「世間の王にして大いなる勝者よ，我々はみなあなたの僕です。無限の涅槃に安住して，お心をいささかもお煩わせ下さいますな．(20)

十方から参集した，世間の灯（であるもの）全てが，意向を巧みに知りつつ，真実の言葉を語るがよい．(21)」[10]

この点で他の仏典に類例を求めるなら，筆者が整理した『普賢行願讃』の各テキスト間の相違ではなく，Heissig の整理した『入菩提行論』の各テキスト間の相違を連想させる[11]．これらの例を見る限り，行文の構成そのものに関しては相互の類似は否むべくもない．

また，梵本，蔵本，漢訳の3者と蒙古本を比較すると，蒙古本の章句は全て蔵本の章句と一対一で対応している．梵・蔵・漢の間で異同がある場合には，蒙古本はことごとく蔵本と一致する[12]．したがって蒙古本は全て蔵本から翻訳されたと無条件で認め得るように見える．のみならず，これらが全て同一系統の

(10) 岩本訳は「あなたの命令を，この世の王者よ，われらは遂行しましょう．偉大な聖仙よ，あなたは憂慮めさるな．安心して，心静かになされよ．(20) 世間を輝かす者よ，われらはすべて十方から集まり来たって，真実の言葉を語りましょう．われらの意向をよく知りたまえ．(21)」漢訳は「我是世尊使 処衆無所畏 我当善説法 願仏安穏住 我於世尊前 諸来十方仏 発如是誓言 仏自知我心」．20d の sedkil-ečegen～soyurq-a については注(8)を参照．対応するチベット語形式も全く同一である．(21)の後半部の蔵文は mos pa rnam par mkhyen pa sa na / bden pa ḥi tshig ni smra bar gyur で，蒙古語としての逐語訳はこのままでは解し難い．

(11) 『普賢行願讃』に関しては樋口1988を参照．『入菩提行論』各テキスト間の相違は Heissig 1976, pp. 146～235 に詳しい．

底本に基づきながら各々が互いに独立した異本であると想定することも不可能ではない.

しかし，詳細に検討すればこれらの間に設定し得る関係はそれほど単純ではなく，大別して少なくとも二つの下位集団に分類可能であることが判明する. その根拠は，①行文そのものはさておき章立てに関しては大きく相違する点があること，②上記の例に見られるような行文の僅少な相違の中には各々のテキストの性格の相違を物語る形式，あるいは製作年代の判定に寄与し得る可能性を秘めた特徴的な形式を含むものもあること，である. 以下ではこの二つの問題を検討したい.

Ⅱ. 『法華経』の蒙古語訳の章立て

第一に，A～Eで章の数が異なる.(13) すなわちABは全28章であるのに対して，CDEは全27章である. この相違は，前者が第11章「見宝塔品」の次に「提婆達多品」を第12章として置くのに対し，後者が「提婆達多品」を独立した一章とせず「見宝塔品」の中に含むことに由来する. 章の総数については，ABは羅什訳とCDEは梵本，蔵本と一致する.

第二に，「如来神力品」（ABは第21章CDEの第20章）までは章の数はさて

(12) 例えば「普門品頌」第27頌から第33頌は漢訳にはなく梵本，蔵本，蒙古本にのみ存在し，また第19頌と第20頌の間にある一文は梵本にのみ存在して，蔵本，漢訳，蒙古本には存在しない，等枚挙にいとまない.

(13) ここで「章」と称するのは漢訳の「品」である. なお以下では章名は羅什訳の品名を採る.

「章」はAでは jüil, その他では bölüg に当たる. 章名は各章の末尾において示される. 第1章「序品」に例を取れば，Aは第1巻の第18葉表（以下では 18r とする，他も同様である）で序品が終了しその直後に terigülen ügülekü̈i neretü̈ eng terigün jüil bolai「初めに語るという名の最初の章である.」とあり，Bは terigün ügülekü̈i neretü̈ eng terigün bölüg とある. C以下は全てBと同じ体裁である.

また蒙古本ではこの「章」より大きな単位が設けられている. Aで keseg, B以下で ayimaγ と称されるものがそれである. これに該当するものは梵本・蔵本・漢訳のいずれにも見当たらない. 仮にこれを「部」と称する.「第1部」eng terigün keseg～ayimaγ は第1章と一致し，以下第3章までは同様であるが，第4部は第4章全部と第5章の一部，第5部は第5章の残りと第6章の全部，第7章の一部からなる，といった次第で，章の切れ目と「部」の切れ目が一致しない場合もある. K868に関しては Ligeti 1942-4, p. 225を参照. K868を例に取れば，各「部」の葉数は最短で16葉，最長で22葉，と概ね一定の範囲内に収まっている. 章の切れ目をある程度まで勘案しつつ各「部」の分量を設定したとおぼしい. なお検討の余地はあるが，蒙古語訳された際，もしくは刻版の際の事情が関与していると推定できる.

おき順序は全て同一であるが，それ以降の順序が大きく異なる．これは「嘱累品」と「陀羅尼品」をどこに置くか，の相違である．この順序については，ＡＢは羅什訳とＤＥは梵本，蔵本と一致する．

今これを整理して示せば次のようになる：

蒙古本ＡＢ・羅什訳	蒙古本ＤＥ・梵本・蔵本
第11章「見宝塔品」	第11章「見宝塔品」「提婆達多品」
12 「提婆達多品」	
13 「観持品」	12 「観持品」
14 「安楽行品」	13 「安楽行品」
15 「従地湧出品」	14 「従地湧出品」
16 「如来寿量品」	15 「如来寿量品」
17 「分別功徳品」	16 「分別功徳品」
18 「随喜功徳品」	17 「随喜功徳品」
19 「法師功徳品」	18 「法師功徳品」
20 「常不軽菩薩品」	19 「常不軽菩薩品」
21 「如来神力品」	20 「如来神力品」
22 「嘱累品」	21 「陀羅尼品」
23 「薬王菩薩品」	22 「薬王菩薩品」
24 「妙音菩薩品」	23 「妙音菩薩品」
25 「観世音菩薩普門品」	24 「観世音菩薩普門品」
26 「陀羅尼品」	25 「妙荘厳王本事品」
27 「妙荘厳王本事品」	26 「普賢菩薩勧発品」
28 「普賢菩薩勧発品」	27 「嘱累品」

また，Ｃの章立ては甚だ混乱している側面があるが，基本的にはＤＥと同じであると考えてよい．この混乱は一面ではＣの資料的価値を少しく損ねるものではあるが，反面これだけを理由にＣの資料的価値を全面的に否定すること

は出来ない．混乱が「嘱累品」以後の章に限られ，しかも局部的である[14]上に，Cには他のテキストには観察できない先古典期蒙古文語特有の形式が保存されていることである．いずれにせよ，章立てに注目する限りABと羅什訳が，CDと梵本・蔵本が密接に関係すると見てよいことは明白である．

Ⅲ．『法華経』における特徴的な言語形式

いわゆる先古典期蒙古文語[15]の特徴的な形式は，奥書きで16〜7世紀に改訳の手が加えられた旨を明記しているA本をはじめとして現存する蒙古本には，テキストの長大さを考慮すれば顕著に保存されているとは言えない．ただこの「改訳」が徹底的なものではなかったためか，先古典期の特徴的な形式が観察

---

(14) 第20章「如来神力品」まではDEと同じであるが，「薬王菩薩品」との間に「嘱累品」の行文の一部が割り込んでいる．「割り込む」とは穏当でないかも知れないがこう表現するのが妥当である．具体的には第6巻の26v20行目で「如来神力品」の行文が終了し，čaγan linqu-a neretü degedü nom-ača : tegünčilen iregsen-ü ridi qubilγan-i ilete bolγaγsan neretü qori-duγar bölüg : : čaγan linqu-a neretü degedü nom arban qoyaduγar keseg : :「『白蓮華なる名の妙法』のうち<如来の神変の力を眼前にあらしめる>という名の第20章．『白蓮華なる名の妙法』の第12部．」とあって，24行目からtendeče（その時）で次の章が開始する．そして一切中断なく28vまで続き15行目で終了するが，その次には qutuγ-tu čaγan linqu-a neretü degedü nom-ača : sayitur öggügsen neretü qorin doloduγar bölüg「『聖・白蓮華なる名の妙法』のうち，<巧みに寄進する>という名の第27章」とある．19行目には tendeče とあり次の第22章「薬王菩薩品」が始まる．この混乱は原典では本来「嘱累品」が末尾の第27章にあったものを刻版の際順序を改めた結果生じた可能性がある．

奇妙な事実はこれだけではない．第7巻は第23章「妙音菩薩品」から始まり中断無く10rで終了するが，これ以降はきわめて錯綜した様相を呈する．同頁17行目から第24章「観世音菩薩普門品」が始まるが，16rv，17rv は字体や体裁を異にする『蓮華経』なる仏典の 16rv，17rv であり，もとの『法華経』の16rv，17rv はない．しかし不思議なことに 15vの最終行と 16r の冒頭は相通じるのである．この『蓮華経なる仏典の16v 最終行で第24章は終了する．18r 以降は再び元に戻るが，21rvは2種類ある．うち1葉は前後相通じるが，もう1葉はどこに続くものか判然としない．25vで第24章は終わる．第26章は30v まで続くが，30rからは再び『蓮華経』となり，もとの『法華経』の行文は 29v までである．ここでも 29v の行末と 30r の冒頭とは相通じる．そして第27章は全て『蓮華経』の行文である．第27章は 32v で終了するが，さらに2葉余分な頁がある．字体，体裁から見てもとの『法華経』の行文で，各々 34rv，35rv と刻まれている．

結局，このCは本来DEと同じ章数，順序であったものを何等かの事情で急遽 AB に合わせて改めたものと見なし得る．その作業が，刻版されて以降現状に至るまでのどの段階で行われたかは不明であるが，きわめて粗雑であったことを物語るものである．それにしても，官版とも称すべき大蔵経に合わせるならともかく，ここでは逆の事態が生じているのは奇妙というほかない．

(15) 先古典期蒙古語 (Pre-classical Written Mongolian)，中期蒙古語(Middle Mongolian) 等の蒙古語史の時代区分やその研究状況，また言語資料としての仏典の位置づけ等については樋口 1980, pp. 176〜7を参照．

できる例外的な事例もある．次に掲げる例文は「見宝塔品（提婆達多品）」の一節であるが，そこにはA～Eの間にわずかにではあるが存在する言語の年代差を物語る形式を見出し得る．

A olan mingγan galab-ud-tur keǰiy-e ber kičiyenggüi anu ese
B olan mingγan galab-ud-tur keǰiy-e ber kičiyenggüi anu ese
C olan mingγan galab-ud-tur keǰiy-e ber kičiyenggüi anu ese
D olan mingγan galab-ud-tur keǰiy-e ber kičiyenggüi anu ese
E olan mingγan galab-ud-tur keǰiy-e ber kičiyenggüi anu ese

A ebderebei : : γurban mingγan yeke mingγan yirtinčüs-ün orod-tur :
B ebderebei : : γurban mingγan yeke mingγan yirtinčüs-ün orod-tur :
C ebderebei : : γurban mingγan yeke mingγan yirtinčüs-ün orod-tur :
D ebderebei : : γurban mingγan yeke mingγan yirtinčüs-ün orod-tur :
E ebderebei : : γurban mingγan yeke mingγan yirtinčüs-ün orod-tur :

A ai ese bügesü čaγan kiǰi-yin tedüi ali ǰüg-tür ber amitan-u tulada
B ai ese bügesü čaγan kiǰi-yin tedüi ali ǰüg-tür ber amitan-u tulada
C ese bügesü čaγan kiǰi-yin tedüi ali ǰüg-tür ber amitan-u tulada
D yadabaču čaγan kiǰi-yin tedüi ali ǰüg-tür ber amitan-u tulada
E yadabaču čaγan kiǰi-yin tedüi ali ǰüg-tür ber amitan-u tulada

A bey-e-ber ese orčiγsan öčügüken ber ügei bolai :
B bey-e-ber ese orčiγsan öčügüken ber ügei bolai :
C bey-e-ber ese orčiγsan öčügüken ber ügei bolui :
D bey-e-ber ese uγuruγsan öčügüken ber ügei bolai :
E bey-e-ber ese uγuruγsan öčügüken ber ügei bolai :

「幾千劫の間いつも（彼の）精進はくじけることが／なかった．三千大千世界において／たとえ白芥子のほど（ではなくと）も，あらゆる方面において衆生のために／転生しなかったことは少しもない．」[16]

ＤＥで使用されている譲歩副動詞語尾の -baču は古典期蒙古文語特有の形式である．[17] ＡＢＣにはこの副動詞語尾の用例はない．既にいくつかの引用文で明らかなようにＡ～Ｅ間の形式上の差はほとんどないというのが実状であるが，それがある場合にはこの例のように，ＡＢＣ(の全て，あるいはそのいくつか)には比較的古風な形式が保存され，ＤＥではそれがより「古典期的な」形式に置き換えられている場合が多い．

一方，Ｃで使用されている bolui は，ＡＢおよびＤＥで使用されている古典期文語の bolai に相当する形式であり，中期蒙古語・先古典期蒙古文語の特徴的な形式である．[18] 先ほどＣの資料価値を云々したのはＣのみがこの形式を保存しているという事実に基づいている．

以上から見る限りＡＢＣが『法華経』の蒙古語訳の中ではより原初的な形態を代表するものと考えることが可能である．また，上記とは性格を異にし製作年代の相違を直接には反映しない類の語句の異同に関しても，概ねＡＢＣ，ＤＥは各々共通するが，両集団の間では相違する場合が多い．次の「譬喩品」第15頌はその間の事情を物語る好例である．

15a

A	kölgen-dür	uduridduγčid-un	jarliγ-i	sonosuγad :
B	kölgen-dür	uduriduγčid-un	jarliγ-i	sonosuγad
C	kölgen	uduridugčidun	jarliγ-i	sonosuγad :

(16) (ai) ese bügesu ～ yadabaču の部分が蒙古語固有の表現としては解釈しづらい．čaγan kiji-yin tedüi の部分と倒置されていると解した．なお検討したい．ちなみに漢訳は次の通りである．「観三千大千世界．乃至無有．如芥子許．非是菩薩．捨身命処．為衆生故．」岩本訳は「三千大千世界において，衆生の幸福のためにあのお方がみずからの肉体を捨てなかった土地は芥子粒ほどもないのです．」．蔵本の該当部分は tha na yud sa dkar tsam gyi phyogs gang du yangで蒙古語のような否定表現は形式上は見あたらない．

(17) 樋口1987, pp. 018～9 を参照．

(18) Poppe 1955, p. 264を参照．

D angq-a urida uduridduγčid-un ǰarliγ-i sonosuγad :

E angq-a urida uduridduγčid-un ǰarliγ-i sonosuγad :

15b

A ene oron-dur burqan-u čimeg-iyer ilete qubilγaqui ba :

B ene oron-dur burqan-u čimeg-iyer ilete qubilγaqui ba :

C ene oron-dur burqan-u čimeg-iyer ilete qubilγaqui ba :

D ene oron-dur burqan-u čimeg-iyer iledte qubilγaqui ba :

E ene oron-dur burqan-u čimeg-iyer iledte qubilγaqui ba :

15c

A ende simnus-a ülü ilaγdaqui büged-iyer :

B ede simnus-a ülü ilaγdaqui büged-iyer :

C ede simnus-a ülü ilaγdaqui büged-iyer :

D ende simnus-a ülu ilaγdaqui büged-iyer :

E ende simnus-a ülü ilaγdaqui büged-iyer :

15d

A tere metü nadur ayul ügei küčün töröbei ::

B tere metü nadur ayul ügei küčün töröbei ::

C tere metü nadur ayul ügei küčün töröbei ::

D tere metü nadur ayul ügei küčün töröbei ::

E tere metü nadur ayul ügei küčün töröbei ::

仮に和訳すると「(a)乗り物で(？)導くもののお言葉を聞いて，この世で仏の装束をまとって化身するものあるいは，ここで(？)悪鬼に負かされぬものによって，そのように私には恐怖がなくなり力が生まれた.」となる．章句全体が蔵文の機械的な逐語訳であるためか蒙古語としては判然としない部分がある．büged-iyer については Ⅳ で後述する．また ede～ende は蒙古文字では《ālef》一個の差であって刻版に際しての誤りと見なし得る．ところがA～Cの「乗り物」の解し難さはこれらとはいささか趣を異にしている．

岩本訳は「この世の指導者である仏の声をはじめて聴き，わたくしの驚きはすさまじかったのです．『悪魔が仏の姿をして，この世に現れて，わたくしを悩ますのであろうか』とさえ思いました．」漢訳は「初聞仏所説　心中大驚疑將非魔作仏　悩乱我心耶」．また対応する蔵文は thog ma rnam par bden gyi gsung thos nas / sa ḥdir sangs rgyas cha byad mngon sprul nas / ḥdi bdud rkyal ka byed pa ma yin grang / de ltar bdag ni bag tsha ḥi stobs skyes so でいずれにも「乗り物」に該当する形式はない．これらを見る限りは「乗り物」はthog ma 'what is uppermost, origin, beginning' (Jäschke p. 237)とtheg pa 'vehicle, carriage' (同 p. 235)の取り違え，といった可能性が考えられる．一方ＤＥにおける該当形式は「先頭で」であり，これは首肯できる．機械的な逐語訳という性格は５者に共通しているが，Ａ～Ｃで散見する形式上の対応関係に関するこの種の「誤訳」はＤＥでは概ね改められている．蒙古語仏典一般に観察できる傾向として，18世紀後半あたりまでは成立年代が下るほど蒙古語形式はより蔵本に忠実になるが，(19) これもその一例と解し得る．したがってＤＥの成立は他に比べ相対的に遅かったと推定することは許されよう．

Ⅳ．『法華経』における büged の用例

büged はコピュラ bü- の分離副動詞形である．中期蒙古語・先古典期蒙古文語においては本来の意味・用法を離れてさかんに使用されたことはよく知られている．筆者は先に『普賢行願讃』の蒙古語訳が先古典期蒙古文語の言語資料として貴重である旨を論じた．その論考の中で，副動詞であるはずの büged

(19) 樋口1987, pp. 24～6を参照．それにしても以上に掲げた，あるいは以下に掲げるいくつかの例文を見ても分かるように，『法華経』の蒙古語訳の「逐語性」の度合は著しく強い．古風な特色を保存しているとはいえＡＢＣを「旧訳」と称することがためらわれる所以である．『普賢行願讃』(後述(iii)を参照）の「旧訳」３種に比べ拙劣な翻訳という印象は免れ難い．極度の逐語訳という点では５者共通であり，ＤＥは形式上の対応をより正確に追求したものと考えてよい．また，ここから Erdeni mergen dayičing tayiji の改訳がどのような性格のものであったかを推測することが可能となろう．

に格語尾が接続するという，未報告の特異な用例が『普賢行願讃』の蒙古語訳に出現することを明らかにした.[20] さらにその後，古典期になって蒙古語訳されたと見なし得る仏典類をいくつか調査した結果，それらにおいてこの格語尾をともなう büged の用例が少なからず存在することが判明した. その一つが『法華経』の蒙古語訳である. 本章ではこの特異な用例を報告するとともに，この用例が提起する問題を論じる.

（i） 中期蒙古語，先古典期蒙古文語における büged

この形式は本来「～であって」の意味を持つはずであるが，中期蒙古語・先古典期蒙古文語における用例を検討して見ると，単にそれだけではなく，種々の特異な機能を持っていたことが判明する.[21]

(1)の(a)～(c)は中期蒙古語の代表的な資料『元朝秘史』の第3巻から任意に取り上げたものである.[22] 傍訳の漢語がいずれの場合も「便」であることから見てもこの büged が単なるコピュラの分離副動詞形として使用されていないことは明かである：

(1)

(a) 札木中合 安荅因 客列列克先 客連 必荅突舌児 孛額惕 折失古 兀格備由

人名 契合 的 説来的 話 咱每行 便 欲圖的 言語有

J̌amuqa anda-yin kelelegsen kelen bida-dur bö'ēd ǰešikü üge buyu

「盟友ジャムカの語った言葉は我々にも何かをたくらむ言葉である.」

(§118)

(b) 失里兀牙 中合中合潺 雪泥 都鄰 歌多魯牙 孛額惕 (§118)

善行 分離 夜 兼行 動咱 便

šili'ūy-a qaγačan söni dülin ködölüye bö'ēd

「まっすぐに離れて夜を徹して動きましょう，すぐに.」

---

(20) 樋口1988, pp. 114～2を参照.

(21) 以下では中期蒙古語における bö'ed～bü'et を無条件に蒙古文語 büged の相当形式と見なす. また後出の de Rachewiltz のように，漢字資料やパクパ字資料ではことごとく bö'et と転写されていることを根拠として文語形式を böged と転写することも一つの方式としては可能であるが，ここでは採らない.

(22) 以下の例のローマ字転写は小沢1985による.

(c) 門 雪泥 孛額惕 勺舌里纒 札木中合 竹克 歌多勒罷古罷原作俗 (§119)

只那 夜 便 相錯着 人名 處 動了

mün söni bö'ēd jöričen J̌amuqa jüg ködölbe kü

「その夜にあって混乱してジャムカの方へ移動した.」

このうち，(b)の用例は『元朝秘史』にのみ出現するきわめて特異な用例でありなお検討すべき点が多いが，少なくとも(a)(c)に関しては，bö'ed は直前の形式もしくは統語的単位を強調し，あるいは何らかのかたちで修飾していると解釈できる．この機能を仮に「小詞的」と称するなら，この小詞的な用例は他の中期蒙古語・先古典期文語の資料においても広く見出すことができる．

(2)は『華夷訳語』「来文」中の用例である.[23] ここでは bü'et は ene が主題であることを示す標識として機能していると解釈できる．

(2) 額捏 不額惕 脱斡舌林 討兀因 約孫 亦訥 孛来

這 便 還 好的 道理 他的 有

ene bü'et to'orimta'u-yin yosun inu bolai

「これこそは のさだめである.」(『華夷訳語』来文中の「勅礼部行移応昌衛」)

(3)(4)は仏典以外の先古典期蒙古文語の代表的な資料のうち『孝経』で観察できる用例である.[24] (3)の用例は(2)と同じと解釈してよいであろう．また(4)の用例は böged が否定辞 ülü を強調するか，あるいは何らかのかたちで修飾していることを示すものと解釈できる．

(3) ečige eke-yügen tejiyegen čidabasu ene böged olan irgen-ü taqimtaγu yosun bolu (10r)

「(自分の) 父母を養うことができるなら，これは多くの人民の孝養の道である.」(『孝経』庶人章，対応する漢文は「養父母此庶人之孝也」)

(4) tüsimel boluγči qan-iyan jalaju ülü idqaqu-yi ülü böged sedkigdekü (31r)

(23) 以下の例のローマ字転写は Mostaert 1977による.
(24) 以下の例のローマ字転写は de Rachewiltz 1982による.

「臣下たる者は（自分の）主君を正して諫めざることを考えてはならない.」

（『孝経』諫諍章，同じく「臣不可以不争於君」）

(5)(6)は先古典期に翻訳されたことが確実な仏典『入菩提行論』における用例である.[25] いずれも上述の「小詞的」な用例と同じく，直前の要素を強調し，あるいは何らかの意味で修飾していると解釈できる.

(5) edür söni ügei nasu ürgülji

imaγta egün-i büged sedkigdeküi yosutu (II-62c, d)

「日夜を問わず永久に，常にこれをば考えねばならない.」

(6) itegel Manjusiri-yi büged

todqor ügegüi-e üjeküi boltuγai (X-53c, d)

「守護者たる文殊菩薩をば，障礙なく見られればよい.」

なお，チベット本における該当箇所は以下の通りである：

II-62c nyin mtshan rtag tu bdag gis ni

d ḥdi nyid ḥba zhig bsam pa ḥi rigs

X-53c mgon po ḥjam dbyangs de nyid ni

d gegs med par yang mthong bar shog

büged に相当する箇所で nyid が使用されている点が両者に共通している. 既に Weller はこの büged の特異な用例は少なくとも『入菩提行論』に関する限りチベット語形式 nyid と関係があるという可能性を指摘している.[26] ただし，全ての用例で nyid が対応しているわけではない. 後述するが，『法華経』の蒙古語訳においても nyid の存在と büged のこの用例との間には「何らかの」のという以上の関係を認めることは困難である.

(ii) 古典期蒙古文語における büged

時代が下るにつれ，büged の「小詞的」用法は次第に稀になる.

仏典を例にとるなら『金剛般若経』にはオイラット語訳を除いて3種の蒙古

(25) 以下の例は後出のチベット語のものを含め Weller 1958 による. ただしチベット語の転写は本稿で採る方式に従い改めた.

(26) Weller 1958, pp. 28～30を参照.

語訳が伝えられているが[27]，このうち翻訳年代が最も古く14世紀にまで遡ることが確実なもの，つまりカンジュール所載の(a) Panča Drišta の訳 (Poppe の言う Anonymous Translation)には，この「小詞的」用法を見出し得るのに対し，17世紀に成立した(b) Siregetü Güši Čorji の訳，および(c) Toyin Guuši の訳には全く見出し得ないことはそれをよく物語っている．

(7)(a) tere yaγun-u tulada kemebesü : tegünčilen iregsen-e aliba tegüs sayin lagšan kemen nomlaγdaγsan tere büged tegüs sayin lagšan ügeyin kü tulada bolai : (7v)

「それは何故かと言えば，完全な相好であると如来によって説かれたものが完全な相好ではないからである．」

(b) tere yaγun-u tulada kemebesü : tegünčilen iregsen-ü nomlaγsan ali tere lagšan belge tegüsügsed-i anu lagšan belge tegüsügsen ügei-yin tula buyu : (3v)

「それは何故かと言えば，如来の説いた相好を完全に具現したものは相好が完全に具現していないからである．」

(c) tere yaγun-u tulada kemebesü : tegünčilen iregsen ber tegüs sayin belge-tü ali nomlaγsan tere kü tegüs sayin belge-tü ügey-yin tulada bolai : (8r)

「それは何故かと言えば，如来が完全な相好をもっていると説いたものが完全な相好をもっていないからである．」

3者は各々翻訳の発想や方針を異にすると解釈できるから単純な比較は危険ではあるが，概ね(a)のbügedは先行する tegünčilen～nomlaγdaγsan tere が述語 ügei に対応することを示し(b)(c)ではその機能を各々 anu, kü が果たしていると見なし得る．この(a)の用法は上述(2)(3)と同じであると考えてよい．

一方，(b)(c)において büged の用例が皆無であるわけではない．しかし，次

(27) 『金剛般若経』の(a)(b)は Poppe 1971, (c)は Sárközi 1972による．

に掲げる(b)の用法は明らかに(7)の(a)の用法とは異質である.[28]

(8)(a) amitan kemen sedkijü orolduqu busu : amin kemen sedkijü orolduqu busu : budgali kemen sedkijü orolduqu-yin tulada bolai : (9v)

「衆生と想念するのではなく，生命と想念するのではなく，補陀伽羅と想念するが故である.」

(b) amitan kemen barimtalaqu busu : amin kemen barimtalaqu busu büged : budgali kemen barimtalaqu busu-yin tula buyu : (4v)

「衆生と誤解するのではなく，生命と誤解するのではなくて，補陀伽羅と誤解するのではないが故である.」

(b)のbüged の意味はこの 形式本来の「～であって」であり，その機能も本来の副動詞の機能から逸脱してはいない. これが 古典期文語における büged の言わば標準的な用例である.

両者における büged の用法の相違は次の(10)においても歴然と観察できる.

(9)(a) tere yaγun-u tulada kemebesü : ilaǰu tegüs nögčigsen a buyan-u čoγča tere büged čoγča ügei-yin tulada bolai : (13v)

「それは何かと言えば世尊よ，徳の蘊であるそれが蘊ではないが故である.」

(b) tere yaγun-u tulada kemebesü: tere buyan-u čoγčas ügei-yin tulada büged : (6v)

「それは何故かと言えば，それが徳の蘊ではないが故であって」

事情は非宗教的な文献資料においても同様である. 次の(10)は Altan tobči nova における上述(1)の『元朝秘史』の各例の該当箇所であるが,[29] そこで保存

(28) 一方(c)における büged はもっぱら teyin büged の一部として使用されているにすぎない. これは梵語の接頭辞 vi-, チベット語の副詞句 rnam par の訳語として使用される形式である. teyin büged 自体は時代の差を問わず仏教文献において広範に 使用される. いま問題としているのはこの種の慣用句として定着した用法ではないため，ここでは特に言及しない. ただ，この形式そのものの意味は「そのようであって」であり，それがなぜ vi-, rnam par の訳語として定着するに至ったかは今後検討を要する問題である.

(29) Mostaert 1952, p. 66 を参照.

されているのは(a)の büged のみである.

(10)(a) tuγar-un J̌amuq-a anda-yin kelegsen kelen bidan-dur büged jigsikü metü üge buyu :

(b) siluγu-a γaγča söni dülin ködölüy-e kemebe :

(c) Tayičiγud ber kökejü mön söni jöričin J̌amuq-a jüg ködelbe kü :

この(a)のような例が存在すること自体年代記としてはむしろ例外的とも言える. Altan Tobči,『蒙古源流』等の古典期文語によって記された代表的な年代記においてもこの種の小詞的な用例は皆無に近い. のみならず, 用例の如何を問わず büged を捜し出すこと自体が困難である. これらにおいては動詞 bol-の分離副動詞形 boluγad やこの口語的な改新形 bolad, bolod 等が古典期文語における「標準的な」büged の機能を担って使用されている. 年代記以外の非宗教的な文献資料についても事情は同じである.(30)

中期蒙古語・先古典期文語においてはそもそも büged が本来の意味, 用法で使用されること自体が稀である一方で古典期文語ではむしろ本来の意味・用法で使用されることは興味深いが, この問題については今後考究したい.

現在のところ詳細な調査は完了していないため確言は出来ないが, ジャンルによってこの形式の出現の頻度が異なることは十分に考えられる. 特に仏典では使用頻度が高いと言ってもさしつかえない. しかし, この事実が何を含意するのか, 例えば仏典においてはいわば擬古的な文体が好まれる傾向があった, といった文体論的な問題に集約し得るものか否か, あるいは蒙古仏典が概ねは翻訳仏典であるから, この形式も一種の翻訳語法として位置づけられ得るのか否か等, 今後考究すべき問題は少なからずある.

(iii)『普賢行願讃』の蒙古語訳における büged

トゥルファン出土文書の中に『普賢行願讃』の断片が2葉あることから見てもこれが既に14世紀には蒙古語訳されていたことは確実である. この仏典は蒙古人の間で愛好されたらしく, 多数の異本がある. その全てが一律に14世紀の

(30) ちなみに, 現代モンゴル語 бөгөөд は文語の büged の借用であるから, 当然ながらその意味・機能は上述の古典期の用例と基本的に同一である.

訳に遡り得るものではなく，幾度か翻訳し直されたものが平行して今日に伝えられている．一つは行文の異同から，一つは翻訳年代の差の反映と見なし得る各々の言語特徴から推して，これらは6系統に分類できる．その中でも筆者が旧訳と称するもの，つまりトゥルファン断片と製作年代が等しいと推定できる一群はさらに3系統に分かれるが，これらにおいては上述の büged の「小詞的」用法の用例が多数観察できることは言うまでもない.[31]

ところが，その中の一つに，次に掲げる異色の用例が出現する.[32]

(11)(a) basa aliber galab-ud-un γurban čaγ-un čaγ činege tedeger-i nigen gšan-u qubi büged-iyer oron edlesügei

(b) ali tede γurban čaγ-un galab-un činege-yi nigen gšan-u qubi-dur büged oron yabusuγai

(c) ali tede γurban čaγ-un galab-un činege-yi nigen gšan-u qubi-dur büged üiledsügei (31-c, d)

「またあらゆる劫の，三世ほどもあるそれらに，一刹那の分で悟入するべく修行したいものだ.」

中期蒙古語・先古典期蒙古文語では接続詞的に使用される kiged に格語尾が接続する用例が観察されるが，これは副動詞語尾 -ged が元来は形動詞語尾であったことを裏付ける証拠と解釈されている．büged に格語尾が接続しているこの用例も文法史的には同様に解釈して差し支えない．

ちなみに，該当する不空訳の漢訳および蔵文は次の通りである．

「三世所有無量劫　刹那能入俱胝劫」

gang yang bskal pa dus gsum tshad de dag

skad cig cha shas kyis ni zhugs par spyad

先ほどの nyid はこのチベット語の例では例用されていない．(a)の qubi

(31) 『普賢行願讃』の蒙古語訳に関しては樋口 1988の第一部を，büged については同 p. 14 を参照.

(32) (a)は筆者のいう旧訳1，(b)(c)は各々23である．ここでは無用の混乱を避けるため(a)はK731，BはK848，CはK1144で代表させ，また特記しない限り和訳は(a)に対してのみ与えた.

büged-iyer は明解には解釈し難い一句であるが，(b)(c) 中で相当する表現が qubi-dur büged であることを参照すると，上記の諸例，とりわけ(5)(6)と少なくとも意味的には相通ずるものと見ることができる．

また新訳では，格語尾に接続するか否かを問わず，もはや büged そのものが使用されていない．次に掲げる(12)は 3 系統のうちの一種新訳 3 の該当箇所のである．ここで旧訳の büged に平行するものとして強調の小詞 ber が使用されていることは(11)における büged の意味を考える際に一助となろう．

(12) alin ber γurban čaγ-un kemǰiy-e-tü galab tedeger-tür
nigen gšan-u qubi-dur ber oron yabusuγai

いずれにせよ，この büged に格語尾が接続する用例はまれなものであり，先古典期に蒙古語訳されたことが確実な仏典の中でこの用例が確認できるのはきわめて少数に限られている．ところが『法華経』の蒙古語訳においてはこの形式が90例余出現するのである．(33)

(iv) 『法華経』の蒙古語訳における büged

büged が全て今問題としている特異な用例の中で使用されているわけではない．出現数から見れば先述した teyin büged の一部としてのものが圧倒的に多い．また古典期的に，繫辞の分離副動詞としての使用例，あるいは(1)〜(6)に見られたような小詞としての用例も観察できるが，(11)と軌を一にする，格語尾を直後に従える用例が大量に出現することが顕著な特色である．次の 2 例は対格語尾が接続する用例である．(34)

(13) qamuγ amitan-a tegünčilen iregsen-ü belge bilig-i üjeküi büged-i üneker üjegülküi edügülbüri-yin tulada : tegünčilen iregsen dayin-i daruγsan üneker tuγuluγsan burqan yirtinčü-dür törökü

(33) 後述の例が示す通りA〜E間で büged の出没には異同がある．いまAを例にとれば92例である．

(34) 冒頭の例が示す通り個々のテキスト間の相違は僅少であり全てを列挙することは必ずしも必要ない．引用は特記しない限りA本の形式に限った．なお，büged をいかに訳出するかは慎重に検討しなければならない問題であるが，とりあえず「強調」の意味を認めて差しつかえないものに関してはその意味で訳出してある．また，以下に引用する例の中にも蒙古語としては解釈しづらい部分が含まれているものもあるが，敢えて直訳した．

boluγu :（「方便品」・26v）

「一切衆生に如来の般若智を見ることをば真に理解させる（ことに）着手（すること）のため，如来応正等覚がこの世に生まれるのである.」[35]

(14) tegünčilen iregsen-ü belge bilig-i üjeküi büged-i üneker bariγul-un jokiyaqui ba :（「方便品」・26r）

「如来の般若智を見ることをば真に理解させようとしつらえることや」[36]

ちなみに蔵文の(13)の該当箇所は

de bzhin gshegs pa ḥi ye shes mthong ba nyid yang dag par ston pa ḥo

で，nyid を観察できるが，(14)では同じ tegünčilen から üneker までが

de bzhin gshegs pa ḥi ye shes mthong ba yang dag par

で，nyid は現れない．büged の出没が必ずしも蔵文との関係では説明できないことが分かる．事情は以下の各例に関しても同様である．

次の2例は属格語尾を従えた用例である．(16)は頌であるから büged の出没は散文に限られないことが分かる．

(15) bi ber γaγča kölgen-eče terigülejü : qamuγ amitan-a nom-i üjegülküi anu eyin uqaγdaqui : qamuγ-i medeküi büged-ün ečüs-tür kürügsen burqan-u kölgen bolai :（「方便品」・24v）

「私は唯一の乗から始めて，一切衆生に法を示すのはこのように理解するがよい．（すなわち）一切智の極致に至った仏の乗である．……」[37]

(16) sayibar oduγsan-u ene sudur-i ali bariγčid :
baγsi büged-ün oron-dur aγsan buyu :
qamuγ amitan-dur ber nom-i kelelegči bolai :
költi toγatan maγad üges-tür mergen boluγu ::

(35) 岩本訳は「(如来の智慧の発揮を）人々に理解させ・・るため世尊はこの世に出現するのだ」．漢訳は「欲示衆生．仏知見故．出現於世．」

(36) 岩本訳は「如来の智慧の発揮を鼓舞し」．漢訳は「欲以仏之知見．示衆生故．」

(37) 岩本訳は「余は唯ひとつの乗物について，それが仏の乗物であると，教えを示すのだ」漢訳は「如来但以．一仏乗故．為衆生説法．」蔵文はde yang ḥdi ltar sang rgyas kyi theg pa thams cad mkhyen pa nyid kyi mthar thug pa ste.

(「法師功徳品」・208v・第76頌)

「善逝のこの法を誰であれ受持するものは／師の境地にあるか／一切衆生に説法するものとなる．／劫の数（ほどの）確かな言葉に巧みとなる．」[38]

次の2例は具格語尾を従えた用例である．

(17) tedeger qamuγ amitan-i ber burqan-u kölgen büged-iyer ber nirvan bolγan jokiyaqu bolai : (「譬喩品」・48v)

「かれら一切衆生をば仏の乗によってこそ涅槃に至らしめるよう工夫するのである．」[39]

(18) tede bügüdeger γurban uqaγan-luγ-a tegüsčü jirγuγan jöng bilig-lüge tegüsün : teyin büged naiman tonilqui büged-iyer diyančid bolbai :: (「化城喩品」・101v)

「かれらすべては三明を具え六通を具え，完全な八解脱によって禅定に至った」[40]

次の2例は位格語尾を従えた用例である．

(19) tendeče bodisdv maqasdv mayidari ber nigen gsan nigen qurumqan-dur jaγur-a büged-tür dörben nököd-ün sedkil-ün onul-i sedkil-iyer-iyen uqaju ele : (「序品」・6v)

「そのとき弥勒菩薩は一刹那に瞬時に四衆の意向を心で悟り」[41]

---

(38) 岩本訳は「この経典を心にとどめて，幾千万の解説に巧みで，すべての者に教えを解くものは，教師の位にあるのだ．」漢訳は「是人持此経　安住希有地　為一切衆生　歓喜而愛敬」．蔵文はḥdi ni de yi sngon du ḥgro bar ḥgyur / bde bar gshegs pa ḥi mdo ḥdi ḥdzin pa yang / slob dpon gyi ni sa la ḥdug pa yin/sems can thams cad la yang chos smra ste.

(39) 岩本訳は「仏の乗物だけで人々を完全な『さとり』に導くのである．」漢訳は「等与大乗．不令有人．独得滅度．」蔵文は sems can de dag thams cad kyang sangs rgyas kyi theg pa nyid kyis yongs su mya ngan las ḥda bar mdzang kyi.

(40) 岩本訳は「かれらはまた三種の学識と六種の神通力を具え，また八種の解放を瞑想する者となった．」漢訳は「皆得深妙禅定．三明．六通．具八解脱．」蔵文は de dag thams cad kyang rig pa gsum dang ldan pa dang mngon par shes pa drug dang ldan pa dang rnam par thar pa brgyad la bsam gtan par gyur to.

(41) 岩本訳は「そのとき，偉大な志しを持つ求法者マイトレーヤは，その一瞬に，これらの四衆の者たちが心の中に思ったことを悟り」漢訳は「爾時弥勒菩薩．欲自決疑．又観四衆．・・・衆会之心．」蔵文は de nas byang chub sems dpa sems dpa chen po byams pas skad cig thang cig yud tsam de nyid la ḥkhor bzhi po rnams kyi sems kyi rnam par rtog pa.

(20) taγalaqun-ača qaγačaqui ǰobalang-ud masida kürtekü̈i tere büged-tür : ǰobalang-un čoγčas-tur orod : (「譬喩品」・46r)

「愛するものから離れる苦しみに大いに苦しむもの，その当人においては苦の集積（の中）に入り[42]」

次の1例は奪格語尾を従えた用例である．

(21) törökü̈i. ötelkü̈i. ebedkü̈i. ükükü̈i. γasalaqui. enelkü̈i ǰobaqui. duran γutuqui. kimuralduqui büged-eče masida getülgekü̈i-yin tulada (「序品」・12r)

「生，老，病，死，憂い，悲しみ，苦しみ，失望，当惑から大いに救うために[43]」

V. 終わりに

今後はA～Eのテキストの一層の整備とそれに基づく文献学的な諸問題の精細な処理が必要である．また今回は単なる用例の報告に終わったが，bügedに関してその意味・用法を詳細に検討することもこれからの課題である．少なくともチベット語形式との関連からでは説明できない部分が多いことは明かとなった．今後は，一つは蒙古語内部の問題としてテキスト処理の中で有意義な情報の収集に努めること，いま一つは梵語を究極の出発点として今日見られる蒙古語仏典が成立する間にいわば仲介者として位置づけられるチベット語以外の言語に関して検討することが必要である．

例えば次のような事実は前者の方向で今後活用可能な情報の一つと言えるかも知れない．すなわち，次の2例のように，該当する蔵語形式は近似しているにもかかわらず，一方では büged が出現し，他方では同じ位置に bükün が出現する事例がある．

---

(42) 岩本訳は「好ましい人とは別離するために起こる苦悩に遭うであろう．しかも，かれらは苦悩の集積の中に転々としながらも」．漢訳は「愛別離苦．如是等種種諸苦．衆生没在其中．」蔵文は sdug pa dang bral ba ḥi sdug bsngal rab tu myong ba de nyid du sdug bsngal gyi phung po ḥkhyor zhing. なお orod はoroγad の改新形である．

(43) 岩本訳は「生・老……失望・当惑を克服して」．漢訳は「度生老病死．」蔵文は skye ba dang rga ba dang……yid mi bde ba dang ḥkhrug pa las shin tu bzla ba ḥi phyir.

(22) sümbür aγula-yin tedüi tngris-ün čečeg-ün ǰambulǰaγui büged-i bariγad : (「化城喩品」・96v)

「須弥山ほどもある天の花の花束を手にして」[44]

(23) tedeger sümbür aγulas-un tedüi čečeg-ün ǰambulǰaγui bükün-i ilaǰu tegüs nögčigsen-e sačubai : (同上)

「かれらは須弥山ほどもある花の花束全てを世尊にまき散らした」[45]

また既に論じた通りA～Eで形式上の差異が観察できる事例はさほど多くはないが，その僅かなものの中には同一箇所においてABでは bükün, CDEは büged が使用されている事例もある．次は「序品」第92頌の後半部である．

(24)

A tere čaγ-tur nomlaqui bükün-i ülü toγtaγan :

tegün-ü ner-e ber anu eyin kemegdemü :

E tere čaγ-tur nomlaqui büged-i ülü toγtaγan :

tegün-ü ner-e ber anu eyin kemegdemü :

「そのときの説法全てを記憶していないので，かれの名はこのように称されるのである」[46]

さらに，次は「化城喩品」第12頌の後半部であるが，やはり同一箇所においてABでは bügüde, CDEでは büged が使用されている．

(25)

A itegel ügei ǰobalang-tan edeger bükün amitan ber

nidun-i γarγaγči amuγulang bügüde-eče nasuda ebderebei :

E itegel ügei ǰobalang-tan edeger bükün amitan ber

---

(44) 岩本訳は「スメール山に等しい量の花弁を手にして」．漢訳は「盛諸天華.」蔵文は lha ḥi me tog gi phur ma ri rab tsam thog nas.

(45) 岩本訳は「スメール山に等しい量の花弁をかの世尊に撒き散らした」．漢訳は「所散之華．如須弥山.」蔵文は me tog gis phur ma ri rab tsam de dag gis bcom ldan ḥdas te la gtor.

(46) 岩本訳は「そのとき語られたこと・・すべて彼の記憶に残らなかった．(彼はヤシャス＝カーマと呼ばれ)，この名で彼は諸方に於て有名であった.」漢訳は「棄捨所習誦　廃忘不通利　以是因縁故　号之為求名」．蔵文は de yi tshe na bshad pa rnams mi zin / de yi ming yang ḥdi zhes bya bar gyur.

nidun-i γarγaγči amuγulang büged-eče nasuda ebderebei :

「救いのない，苦悩をかかえたこれら全ての衆生は，眼を失ったもの（であり）一切の安楽を永遠に奪われているのである.[47]」

これらの例においてbügedと互換性を示す bükün, bügüde は一残念ながらこの種の事例は僅かしかないが一ともに「全て」の意味である．このことからbüged の多様な意味の一部として「複数性」あるいは「集合性」に関わるものがあると考えることは不可能ではない．全ての büged の用例をこれで説明できないことは明かである．しかし，今後格語尾接続の有無を問わず広く büged 一般の意味・用法を考察していく上でこれは一助となり得るであろう．

また，既に掲げた「譬喩品」第15頌の第3句では古風な特徴がほぼ払拭されているにもかかわらず，büged に格語尾の接続する形式が保存されていることは注目に値する．これはこの形式が例えば bügsen などとは趣を異にし，単に古風というだけではすまない，何かそれ以外の含意をもつことを物語ると解釈できる．それが何であるかは今後の解明をまたねばならない．

参 考 文 献

小沢重夫，1985，『元朝秘史全釈（中）』，風間書房.

坂本幸男・岩本裕訳注，1964，『法華経』上・中・下，岩波文庫.

樋口康一，1980，「羽田博士旧蔵蒙古仏典写本断片について」，『アジア・アフリカ言語文化研究』No. 20, pp. 174～203.

樋口康一，1987，「『宝徳蔵般若』の蒙古語訳について」，『東洋学報』第68巻，第1，2号，pp. 01～027.

樋口康一，1988，「蒙古語訳『普賢行願讃』の研究」，『内陸アジア言語の研究』Ⅲ，pp. 1～157.

樋口康一，1989，「蒙古語訳『仏頂尊勝陀羅尼経』の研究」，『言語文化接触に関する研究』第1号，pp. 1～66.

Aalto, P., 1954, "A Catalogue of the Hedin Collection of Mongolian Literature", in

(47) 岩本訳は「この不幸な人間はあらゆる苦悩にさいなまれ，眼を奪われたかのように楽しみが少ない.」漢訳は「衆生常苦悩　盲冥無導師」．蔵文は skye dgu ḥdi kun mgon med sdug bsngal te / mig phyung bde ba dag las rnam par nyams.

Contributions to Ethnography, Linguistics and History of Religion, Stockholm, pp. 67～108.

de Rachewiltz, I., 1982, "The Preclassical Mongolian Version of the *Hsiao-Ching*", *Zentral-aschiatische Studien* 16, pp. 7～109.

Heissig, W., 1954, *Die Pekinger lamaistischen Blockdrucke in mongolischer Sprache*, Wiesbaden.

Heissig, W., 1962, *Beiträge zur Übersetzungsgeschichte des mongolischen buddhistischen Kanons*, Wiesbaden.

Heissig, W., 1976, *Die mongolischen Handschriften-Reste aus Olon süme Innere Mongolei (16. -17. Jhdt.)*, Wiesbaden.

Heissig, W., - Bawden, C., 1971, *Catalogue of Mongol Books, Manuscripts and Xylographs*, Copenhagen.

Jäschke, H. A., 1881, *A Tibetan-English Dictionary*, London and Henley.

Ligeti, L., 1942-44, *Catalogue du kanǰur mongole imprimé*, Budapest.

Mostaert, A., 1952, *Altan Tobči A Brief History of the Mongols by* bLo-bzaṅ bs Tan-'jin, Cambridge, Massachussetts.

Mostaert, A., 1977, *Le matériel mongol du* Houa I I Yu 華夷訳語 *de Houng-ou (1389)*, Bruxelles.

Poppe, N., 1955, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki.

Poppe, N., 1971, *The Diamond Sutra*, Wiesbaden.

Poppe, N., Hurvitz, L., Okada, H., 1964, *Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko*, Tokyo and Seatle.

Sárközi, A., 1972, "Toyin Guiši's Mongol Vajracchedikā", *Acta Orientalia Hungarica* 27, pp. 43～102.

Weller, F., 1958, "Anfragen eines Nichtmongolisten an den Mongolisten", *Central Asiatic Journal* 3, pp. 23～61.

Wogihara, U. and Tsuchida, C., 1958, *Saddharmapuṇḍarīkasūtram*, Tokyo.